



となみ芸術文化友の会 新会長挨拶

会長 廣瀬 慎一

吉田武雄前会長・堀田多聞前副会長には、絶妙の連携で長年当友の会の発展に尽力されました。紙上を借り深く感謝申し上げます。組織には前会長のような重石が必要ですが、残念ながら私は軽石です。そこで美術・文化行政にも経験の深い小西竹文さんに副会長をお願いしました。会員の皆さんと協働の心で、美術・文化を楽しむ雰囲気づくりに努めたいと思います。

さてわが友の会は、一般年会費 3,000円で美術館と文化会館双方の活動をサポートしています。そして文化会館には独自に年会費 1,000円のホールメイト制度があります。このような仕組みは他市におけるものとは少し異なっています。当会設立以来、年経過した今日、これらのことを含め現状でいいのかどうか、組織点検をしておく必要があるのではないのでしょうか。私は幼稚園の卒業作品で、タイタニックのような大きな船から飛び込んでいる絵を描きました。大好きな美人の先生に、「これはなんですか」と優しく問いかけられ、自分でもなんでこんな絵を描いたのかわからなくなり、黙ってうつむいてしまいました。少し長じてからは、「人前でペン・筆を持つな」と親に諭され、なるべくそのようにしてきました。天はなぜこのように能力差をつくり依怙最良をするのでしょうか。昨年の7月11日付米紙に、永年の研究の結果、「お金で幸福は買える」ことがわかってきた、という記事がありました。これはイグノーベル賞ものだと思いますが、この依怙最良問題についてもぜひノーベル賞クラスの成果を上げていただきたいものですね。

私が当会への加入した動機の一つは、砺波の著名な作家の方々と直接お会いできるということでした。それは当会の会合や懇談会で実現できました。これからもこのような機会を有効に利用して、皆さんとともに少しでも多くの作品を楽しめたらいいなと思っています。

『小倉遊亀展 人・花・仏』について

会期 7月27日(土)～8月25日(日)

砺波市美術館 学芸員 末永忠宏

小倉遊亀は女性として初めて日本美術院同人となり、日本芸術院賞、文化勲章など数々の誉れに輝く日本画家です。明治28年、滋賀県大津市に生まれ、平成12年に105歳で亡くなりました。大正から平成にかけて、珠玉の日本画を世に送りました。

今回のポスターには「娘」(昭和26年)を選びました。戦後あらゆる価値観が見直され、日本画の行くべき道が改めて問われた時代に、小倉遊亀の「娘」は一つの解答でした。絵づくりが伝統的日本画のそれだけでなく、20世紀西洋絵画の影響を色濃く受けています。当時、東京国立博物館で見たマチス展のショックも大きかったようです。

以後、小倉遊亀はマチス、ピカソを日本画で描くような、色彩効果による画面構成、デフォルメ、造形の単純化を大胆に試みしました。こうした色彩主義が桃山時代の宗達を生み出したものと相通じるところを自覚していた為か、皮相な形状模写に留まらず、かつ大らかさを失うことはありませんでした。

「家族達」(昭和33年)になると、新婚夫婦がモデルです。こうした身近なテーマが日本画の展覧会に発表されることは稀であったことを考えるに、小倉遊亀の存在によって、日本画家の意識と社会的役割が大きく変わって行ったことが分かります。

—私ね、物みな仏でないものはない、と思っている。ピーマンで



『娘』(昭和26年) 滋賀県立近代美術館蔵